

## 令和2年度 1学期 終業式 校長の話 「当たり前に感謝」

今日で1学期が終わります。授業を行えた日は46日。いつもの年の半分でした。あっという間でしたね。

ただ、いつ教室へ皆さんの様子を見に行っても、お休みしていた分を取り戻すかのように集中してお勉強をしていたので、授業時間は半分でも、できるようになったこと、わかったことは、半分以上、たくさんあったと感じています。

さて、この1学期は、コロナウィルス感染症を予防するために、今まで「当たり前」のようにできていたことができなくなりました。

例えば…

みんなで集まって遊ぶこと

友達と会話を楽しみながら給食を食べること

青空のもとプールで泳ぐこと

運動会で大きな声で応援すること

私は、できなくなってみて、このような「当たり前のことが当たり前」にできていたことは、実は、幸せなことだったのだと改めて思いました。

そこで今日は、32歳という若さでなくなった井村和清さんが、家族に残した文章をみんなに聞いてほしいと思いました。心打たれた人も多く、本にもなりました。

井村和清さんは、お医者さんでした。30歳のとき右のひざに病気が見つかりました。病気が体の他の部分に移らないようにするため、右足を切り離す手術をすることになりました。手術は成功し、命は助かりましたが、左足だけの体となり、今までと同じような生活を送ることは難しくなりました。

そして2年後、残念なことに肺にも新たに病気が見つかり、帰らぬ人になってしまったのです。

では、紹介します。題名は、「あたりまえ」です。  
井村和清さんがなくなる数日前に書いた文章です。

「あたりまえ」

こんなすばらしいことを、みんなは なぜよろこばないのでしょう

あたりまえであることを

お父さんがいる お母さんがいる

手が二本あって、足が二本ある

行きたいところへ 自分で歩いてゆける

手をのばせば なんでもとれる

音がきこえて 声のでる

こんなしあわせは あるでしょうか

しかし、だれもそれをよろこばない

あたりまえだ、と笑ってすます

食事がたべられる

夜になるとちゃんと眠れ、そして又朝が来る

空気をむねいっぱいにする

笑える、泣ける、叫ぶこともできる

走りまわれる

みんなあたりまえのこと

こんなすばらしいことを、みんなは決してよろこばない

そのありがたさを知っているのは それを失くした人たちだけ

なぜでしょう

あたりまえ

ベッドの上、動けない状態にあった井村さんは、どのような気持ちでこの文章を書いたのか想像してみてください。

私は、新型コロナウイルス感染症のため、今まで通りの生活を送れなくなってから、「当たり前なことは素晴らしいこと」で、「当たり前のありがたさ」に感謝をしながら過ごしていこうという気持ちが強くなりました。

朝、元気に挨拶をするみんなに、ありがとう  
友達と仲良く過ごしているみんなに、ありがとう  
一生懸命、お勉強を教えてください先生方に、ありがとう  
学校をきれいにしてくださっている主事さん方に、ありがとう  
ありがとうにあふれる学校です。

いよいよ明日から夏休みが始まります。家族や地域で過ごす時間が多くなります。学校と同じように、おうちやみんなが住む町にも、「当たり前の幸せ」がたくさんつまっています。

掃除や洗濯をしてくれる家族に、ありがとう  
困っているとき助けてくれる家族に、ありがとう  
朝早くラジオ体操をしてくれる地域の人に、ありがとう  
夜の見回りをしてくれる地域の人に、ありがとう

「当たり前のこと」に目を向け、まわりの人に「ありがとう」の感謝の気持ちをたくさん伝えてください。

そして、感謝の恩返しとして、自分が当たり前にやれること…勉強や運動、家庭の仕事を進んで行ってほしいと思います。

最後に、我慢することが多かった1学期、大きなけがや病気をすることなく登校し、新しいルールを守って生活をしてくれたみんなに「ありがとう」の気持ちを伝えて、私の話を終わります。

では、8月25日に、元気にお会いしましょう。